

調査報告

この国の原子力最前線を行く

——若狭現地の原子力施設と宗教者を訪ねるフィールドワークレポート(その2)——

梅 森 寛 誠

—此度、国策として原子力との「共存」を強いられ続けている若狭の地を訪問し、林立する原子力施設を見、また現地で闘う宗教者の声を聞き、状況を肌で感じつつ学び、本質を訴えるための原点としたいと思います。—

二〇一〇年四月初旬、私たちは、世間的な「環境問題」を是正しまた超えていく道を求めて、若狭の原子力最前線を訪ねることになりました。すなわち今、放射能汚染や被曝労働をぬきにしては語れないはずの原発が、その発電段階でCO₂を排出しないことをもってクリーンなエネルギーであるかのような倒錯した宣伝攻勢が、国や事業者によって行われています。私たちはこうした歪んだ現状を見すえつつ、その原子力政策によって、被曝労働者のみならず地域環境（住民や社会全体）が蝕まれ続けずにはおかぬ現地を訪ね、本質を求めるためのフィールドワークを企画したものです。

特に今回は、最前線の現地であればこそその困難の付きまとう中で、一人この地に立ち求道を続ける宗教者の声に、耳を傾けました。報われることの少ない、しかも終わりの見えてこない苦悩多き現場に身を置き、人間の犯した過ちを静かに見すえ、世間の「十方の土」に対する「爪上の土」の真理を求める生き方は、教派宗派を超えた宗教者の真骨頂というべきものでしょう。あるいは、その中にこそ、現代の闇に包まれたかに見える混迷から未来に対して一筋

の光が投じられていることを、私たちは認識すべきなのかも知れません。

もとより、一泊二日の短時間で状況を理解したとは到底言えず、原点に触れたのみではありますが、原子力や「環境」をめぐる真の問題点に関して、今後さらなる関心が高まっていくことを念願し、簡略ながら以下報告します。

（二〇一〇年二月末 執筆）

若狭の原子力の今

フィールドワークの呼びかけ文の冒頭にはそのあらましを記しました。現在四地点一三基の軽水炉が稼動し、そのうち敦賀一号機と美浜一号機が本年（二〇一〇年）中に運転四〇年を迎え、三〇年超の老朽原発がこの地域に八機抱えること。敦賀三、四号機のさらなる増設計画が進められていること。使用済み燃料の中間貯蔵施設立地の策動があること。高浜原発でのプルサーマルの準備が進められていること。そして、直下に活断層がひしめき大地震も想定される中で、高速増殖炉・原型炉『もんじゅ』の一五年目の運転再開が迫っていること。

実は、今回訪問の年度末・始めの時期は、行政的事情の中で『もんじゅ』の動きに関し緊迫した状況を迎えることも考えられました。結局『もんじゅ』は五月六日に一四年五カ月ぶりの運転再開を強行。ところが、その準備段階から機器の故障や警報機作動が頻繁にありましたが、はたして新燃料交換後の八月二六日、重量三・三トンの炉内中継装置が落下する事故が起きました。そしてその取り出しにも失敗し、次のステップ「四〇％出力運転試験」開始が遠のくのは確実となりました。すなわち、当初から予想されていたものの、トラブルが相次ぎ、設計施工上のミスも疑われ、技術的にも正常な運転がかなり難しいことを自らが証明しているかのようでもあります。今後ほぼ必然的に起こるであろう事故やトラブルの規模やタイミングが大いに懸念されるところです。

『もんじゅ』がますます中、九月に六ヶ所再処理工場竣工の二年延期が発表されました。ガラス固化体製造試験で

の事故・トラブルがその大きな理由ですが。その直前（八月三十一日）にむつ市の「リサイクル燃料備蓄センター」（いわゆる「中間貯蔵施設」）が着工されました。この施設の操業開始は再処理工場の操業予定よりも早く、今後脱「再処理」が進むという見方も出ています。同様の意味で、『もんじゅ』の動向も睨みつつ、若狭に於ける「中間貯蔵施設」建設の策動（以前にもあった）が現実味を増すことも考えられます。もちろん、これは「中間」ならぬ、事実上最終的な「核のゴミ捨て場」になる可能性も高いものですが。

既にこれまで、『もんじゅ』頓挫から浮上したプルサーマルが、全国三地点で実施され、それ以外の所でも実施に向けた準備が進められています。若狭に於いても六月末、高浜三、四号機のプルサーマル用のMOX燃料が、市民の抗議行動の中で搬入されました。

そして、これらはいずれも、地元の県や自治体へ莫大な交付金（国民の税金）、いわゆる「原発マネー」がばらまかれながら進められています。「若狭へ原発を集中化させた過程でも、権力（国策）や暴力（機動隊・警察・警備等）が駆使されたけれども、最も有効だったのは金力（交付金等）だったかもしれない」（はとぼっぽ通信「一七七号」）同通信には「心がヒバクしている」という若狭の地元住民の痛切な告白を紹介しています。

今回の訪問コースの概要

この二〇数年、敦賀をはじめ若狭には何度足を運んだだろうか。初めて訪ねた時の「何でこんな美しい場所に何でこんなに原発が」の率直な衝撃は、今でも私の体の中に脈打っています。そしてそれは、この地の古代以来の大和政権や朝鮮半島との関係、あるいは軍事拠点とされた近代以降の特性、またそうした地理的歴史的背景のもとで幾重にも構築された差別の構造、これらと深い関わりがあることが、徐々に知られることになりました。今回も、そうした深い部分での「発見」や「感得」は、お話を伺ったり実際に現場に立つたりすることを通じて確認することができ

たように思います。今回の訪問がそうした「背景」を知ること直接的目的としたわけではなかったにしろ、今日の場合と今後の動向を見るに当たって、それらは極めて重要で、その意味で大変有意義なフィールドワークができたことに、関係協力をいただいた皆様に感謝したいと思います。

1. 市民運動史を聞き、敦賀半島東岸を行く―立石・敦賀原発へ

さて、今回若狭訪問の話が出た際、このテーマに関する「一日の長」が認められたものか、私とそのコース日程の原案を作成し現地との連絡を行う役目を担うことになりました。前日から出発し、敦賀駅に午前一〇時過ぎ集合。一日目は、そこから三好師（大阪）の車に乗り、地元の真宗大谷派僧侶・岡山巧師の案内にて終日、敦賀半島をめぐり、お話を伺い、また原子力施設や関係地を訪ねることができました。

まずは、地元で長らく反原発市民運動を担ってこられた太田和子氏宅を訪問し、当地の歴史的経緯や運動史等、自らの体験や思いも交えた貴重なお話を伺いました。昼食後、太田氏の話にも登場した気比松原の海岸にたたずみ、敦賀半島の東岸を北上しました。途中「国宝・朝鮮鐘」で知られる常宮神社を訪ね、古代からの朝鮮との厚く深い交流の歴史と、（境内に散見される電力会社や原子力メーカー等の寄付事跡から）現代の原発企業とのこれまた厚く深い関係を偲ぶことにもなりました。そして日本原電・敦賀原発へと向かい、PR館から「四〇歳現役」の一号機（BWR型）とタイプの違った二号機（PWR型）を間近に臨み、さらにそこから程ない漁村の名残を残す立石地区へも足を延ばしました。ほぼ半島の先端部に位置し、車道は途中で行き止まりになります。ハンゲル表記のゴミが多数漂着していたのが印象的でした。

2. 水晶浜と美浜原発、そして『もんじゅ』へ

そこから道をもどり半島を横断して美浜町・丹生へ。前面にはいきなり、水晶浜という名に恥じない美しい海水浴場が現れます。シーズンになれば京阪神から相当数の行楽客が押し寄せることでしょう。グロテスクなまでに屹立する関西電力・美浜原発三基を至近にはつきり臨みながら。実際、ここで写真家・樋口健二氏が原子炉を背景にして海水浴を楽しむ人々の姿を撮った写真（二〇〇四年八月の美浜三号機・配管破裂死傷事故の時には大いに賑わっていた）が台湾で「原発安全」PRに使われた、とは最近本人から聞いたところでもあります。

橋から対岸の原子炉を臨む位置にある美浜原発のPR館は閉鎖中のようにもあり素通りし、道を北上、いよいよ高速増殖炉『もんじゅ』へ車を進めます。『もんじゅ』と併せて建設されたというトンネルを過ぎれば再び敦賀市へ。まもなくその原子炉が視界に入ります。白木という朝鮮の新羅に通じる地名をもつ当地は、長らく「陸の孤島」的な状態にあったとか。歴史的にも陸上よりも海上交通が発達していたことは間違いありません。『もんじゅ』建設に伴って、わずかの戸数のこの地区の人々の生活環境が激変することになったことも容易に想像されます。

さて、私たちにとっても悩ましい『もんじゅ』命名の由来は、その事業体（現在は日本原子力研究開発機構）のカラー刷りパンフに明記されています（今の発行パンフでは未確認だが）。そこでは、智慧を象徴する文殊菩薩が獅子に乗っている姿を、巨大な核エネルギー（プルトリウム）をコントロールする原子炉になぞらえて説明します。が、こうした当事者すら神仏頼みの感もあった『もんじゅ』は一九九五年二月八日、ナトリウム火災事故で、その後の原子力行政の修正を余儀なくしました。私はこれまで、釈尊成道時に「核エネルギーをコントロールする」という人間の傲慢さをこそ制御すべし、と私たちにさとらせてくれる再考の機会が与えられた、はずだ、と語ってきました。その間の悲しいままであらわになった人間の痴かさの代償は今後、その選択に全く責任のない将来世代が甘受しなければなりません。核武装こそが真の（ウラの）目的であることが見えてきた『もんじゅ』（ここから九九%もの高純

度の兵器級プルトニウムが生み出される」を、幾度も反対集会場となった白木の海岸から拝し、また様々な意味に於ける「祈り」と「懺悔」の念が湧き出てくるのを禁じ得ませんでした。

3. 敦賀と小浜の仏教者と

万感の思いで『もんじゅ』を後にした私たちは、一路敦賀市中心部にもどり、真宗大谷派西誓寺へ。ずっとご案内いただいた岡山師の自坊で、夕刻二時間以上に渡って、原発城下町の最前線に於いて僧侶として活動する中で起こった出来事やもたらされた情報等、重くシンドくも濃密な話を伺うことができました。○八年九月、私も世話人として関わる『原子力行政を問い直す宗教者の会』主催の全国集会を敦賀で行い、岡山師は地元責任者として奔走。市民対象のプレイベントを催したことから、地元メディアの注目と市民の反響を集めた、という。最前線ならではの原発「タブー」感の強い中で一石を投じることになった師の言葉には、淡々としながらも説得力をもって響くものがありました。

翌日は、若狭を西へ、小浜の真言宗御室派明通寺に中寫哲演師を訪ねます。ここは九世紀はじめの創建による名刹で、鎌倉時代建立の三重塔と本堂が国宝に指定されています。訪問時三重塔は修復工事中で全貌を拝することはできませんでしたが、私たちは宗祖の時代の息吹をそのまま伝える本堂に入り、国重要文化財指定の諸像（一一世紀造立）を、解説をいただきながら目の当たりに拝むことができました。それだけで胸が一杯というところですが、本番はそれからです。中寫師は、僧侶として原発運動を担う、その存在を私が八〇年代初頭に知り数年後お訪ねして以来久しくお付き合いいただいている、この道の「先導者」でもあります。今回は私たちのためにたくさん資料を用意し待機してくれました。ここでもまた、自身の運動史や寺沿革との関連、若狭の現状や今後の展望等について、時間を忘れるほどの話し合いを情熱的なまでに展開することになりました。

4. 大飯原発を通過し、高浜原発を間近に

かくして昼食をとる時間は打ち過ぎ、コンビニ食品を慌ただしく車中で胃袋へ押し込みながら、さらに西へ移動となりました。関西電力PWR型の大飯原発と高浜原発がそれぞれ四基鎮座し、専ら京阪神へ電力供給しています。

さて、大島半島を大飯原発へ、と行きたいところですが、ここは通過することになりました。時間がとれないという理由もありますが、ここの原子炉は陸側からは見えません（他に北海道電力・泊原発もそうだったか）。住民の視界にはほとんど入らないまま、海側（つまり朝鮮半島側）には開放されているわけです。

対照的に県最西部の高浜原発は観察し易い、ということもあって、こちらを見学対象にしました。ここは、原子炉のみならず、取水口も道路から簡単に観ることができます。七〇年代八〇年代運転開始の、今ではさほど大型の部類には属さない原発とはいえ、間近に観ればさすがに迫力があります。何しろ毎秒百トン以上の海水が吸い上げられるわけですから。そして出す方はいえ、周りの海水より七℃高い温排水として海に戻されます。生態系に影響なしとは言えません。微量の放射能も含まれています。これは、核分裂して発生する熱の約三分の一しか電力に利用できない、原発の効率の悪い構造によるものです。若狭の原発群全体では、二二〇万KWもの廃熱が生み出されることになります。発電の際にCO₂を出さないことを誇張する原発は、一方で局所的とはいえ膨大な廃熱によって、ヒートアイランド的な（地球温暖化はともかく気象異常をもたらしかねない）作用を起こすことも考えられないことではありません。

湾状に原子炉を目と鼻の先に臨んだ地点に釣り堀があり、釣り糸を垂れている人たちも見受けられました。平和な光景、なのかも知れませんが。

5. 番外編ですが、舞鶴での感動も

高浜を過ぎればすぐ京都府舞鶴市です。実は、この「浮島丸事件」現場に行きたいという私の希望で予め時間を確保していましたが。すなわちこれは、一九四五年八月の解放直後、大湊（青森）から釜山へ向かうべく、日本で徴用されていた朝鮮人を多数乗せた船が、途中舞鶴港付近で謎の爆発（「自爆」「触雷」両説ある）を起こし沈没し、乗客乗員五四九名の犠牲者を出した事件（事故）ですが、同行した三好師の働きかけにより、沈没現場と特定される場所まで小型船舶で案内を受ける、という思いがけない感動体験をいただきました。

今回のレポートの趣旨とは直接的につながるものではないので、詳細は省略します。ただ、もともと軍事拠点で今や核燃サイクルの要とさせられた下北半島と、敦賀と舞鶴というやはり軍事拠点に囲まれた『もんじゅ』や「原発銀座」を抱える若狭、そして朝鮮半島。偶然ながらこれらをつなぐ形となった「浮島丸事件」には、それ自体無関係とはいえ、謎に包まれたミステリアスな面も含め、引き付けられるものを感じていたことをのみ、今は記しておこうと思います。

取材先で伺ったお話

ではいよいよ、取材した三名のお話の大略を書き留めておきたいと思います。訪問コース概要で記した通り、今回は、敦賀の太田和子氏と岡山巧師、小浜の中嶋哲演師に、それぞれ主に私が聞き手となり、同行者の質問や感想も自由に交えながらインタビューを試みたものです。当然ながら同行者の報告と重複する部分も少なくないとは思われますが、関心や受け止め方は一様ではないので、敢えて整理はせずに掲げたいと思います。

1. 「一人で原電前に立つて」(太田和子氏)

反原発運動には、開発に疑問を感じて関わり始めた。一九六四年当時、敦賀半島は太古の自然が残っており、そのことは若狭湾国定公園に関する学術調査でも認められていた。同時期に原発立地の計画も起こっていたが、太古の自然の宝庫にはできないと思っていたところ、抜き打ち的に敦賀にもってきた。そういうところが許せない。

まず、原発道路を広げるために、名勝「氣比の松原」の松が三百本伐られた。かつては今の三倍の規模だったが、戦時中には松根油を採るために、そして六〇年代にもまた。「敦賀半島は第一種特別保護地区なのに破壊してもいいのか」と知事へ掛け合ったが。国定公園の指定には、学術調査をもとに審議されるが、子ども用ブランコ一つあってもその部分は人工の設備として「自然公園の価値なし」と除かれるが、一旦指定されれば、その後は何が出来てもかわらない。知事の現状変更認可で「原発百できて可」となってしまう。また、学術調査をした「日本自然保護協会」は「貴重な自然」と言いながら、壊される時一言の苦情も言わないが、そこは厚生省(当時)の天下り組織だということがわかった。

その間、二〇代の人たちが反原発運動を密かに始めていたが、一九八一年の敦賀原発放射能漏れ事故で大騒ぎになった頃、講演会で幼稚園教員時代の卒業生と会い、そのグループの人たちを知った。彼らは集まる所がないと言うので、ここの場所を提供して活動拠点とした。『もんじゅ』の公開ヒアリングの時は百人ぐらい来て徹夜行動をして。世界中の人も受け入れて。だが、運動の成果は全然ダメで、それが不思議だったが。たまたま高校の日本史の教員にそのことを話したら「アンタらは庶民の歴史知らんからダメや」と言われた。そしてこの地域の「庶民の歴史」に目が開かれた。

(そこから敦賀原発が立地する立石地区住民の苦しみと原子力開発との関係、差別構造がわかってきた) 最初の頃、私は立石の漁師たちに、原発に土地売らないように頼みに行ったが、親しい関係にもかかわらず、冷たかった。立石

の人たちには、船を着ける場所がない。沖に留めておくが、嵐がくると避難させたり、大変だった。

（地域の中にも中心部と周辺部との差別がある）立石の人たちには、命懸けで採った魚を売る権利も市場に運ぶ権利もない。ほとんどタダ同然でとられた。その何百年という歴史、その怨念が原発をつくった、ということが初めてわかった。

また、ここには江戸時代はじめてから棚田が作られたが、肥料も稲束も全部船で運んだ。男は漁に出て田圃は女の人々の労働になった。それは大変な労働なので、（原発が）田圃を全部買い上げてくれるということに負けたようだ。（立石地区は敦賀とは全然違う。敦賀は港をもち裕福で殿様商売で成り立っていた）農家の嫁不足で田圃があつたら誰も来ない、と若い人が「売る」と言ったらしい。

（ここが開発から取り残された理由は）敦賀半島が陸軍の要塞地帯であつたこと。山歩きも写真撮影も禁止で太古の自然が守られた。

（太田さんはお寺の出身で、立石によく遊びに来た、ということだが）ここに住職がいた。昔はお寺が分校で先生を兼ねていた。その後先生が転勤で行くようになった。それでお寺は収入がなくなり、ここは無住になった。それで父が兼務をするようになった。ここは船がないと行けず、船が迎えに来た時私も一緒に乗ってよく遊びに来た。

（原発がつくられた後、この地区の人たちの意識はどうか）豊かになってよかったというわけではなさそうだ。今は嫌だから行かないので知らないが。私の記憶にある風景を心の中で守っている。

私が「敦賀反原発ますほのかい」（※）の代表の時、事故が起こると記者が私にコメントを求めて来たが、それが嫌だった。「事故が起こるのは罰（バチ）だ」と喜ぶわけにはいかないから。代表は替わってもらったが、皆だんだん忙しくなり、定期的に集まるのが難しくなつて、「会は一人でやってくれ」となつた。原電前に立ったのは、三、四号炉増設で測量が始まるという時。「何もせんのか」と言う記者に腹を立てて「できることは全部した」と。結局

私一人で日本原電前で毎日抗議行動をする、ということになった。すると原電前に道路工事がはじまったが、工事の人たちは割合親切だった。毎日の行動は、病気でさすがに難しくなり、その後間隔を空けて長くやろうと、今は一週間に一、二回になっている。

以前、公安の刑事が家に来たが、その人は昔の教え子だった。「もう決まったことだからお止めになったら」と言う。私は「止めません」と。(反対運動しているから向こうが「太田さんの所へ行け」と?) よくわからないが「原発の係」と言ってしょっちゅう来るようになった。でも原発のこと何も知らないので少し話してやった。

(原発あるが故の問題、身近に放射能の問題とかは?) 私はそんなことどうでもいい。私は一切考えない。事故や放射能汚染が起こったら、それは人間にとっては罰(バチ)。みんな贅沢したいし電気は使いたいんだから仕方がない。原発増設で浜が埋め立てになった時、カニや魚はどうなったか。サザエが逃げ場がなくてワーツと浜に上がってきた。(ここで採れた魚介類は地元の人食べるか?) 食べる。地元の人には放射能が危険だと思わんようにしている。

放射能は目に見えないし。この人たちが土地売ったからどうしようもない。親戚が多ければ、署名に歩いても「お祖父さんが白木のもんやし」とかで難しい。

(今、敦賀の市民はどういう感情をもっているか?) 私が長く反原発運動やってきて気がついたことは、人に嫌われる、ということ。「正しいことわかったが、アンタは正しくない」と。それに気がついて掲示板作った。そこに言いたいこと入れておけば、見たい人だけ見ればいいし、こちらからはものは言わない。応援してくれる人は何人もいると思うが、やり続けると嫌われる。

※「敦賀反原発ますほのかい」Ⅱ 敦賀湾に生息する和名『ちどりますほがい』に因む。以前は沢山いたが、汀がこわされ殆ど絶滅。どんな小さな生命も大切に、という願いを込めて会の名前とした。

2. 「住民被曝が既に起こっている」（岡山巧師）

（現地ならではの重いものを抱え、特に原発への姿勢を真正面から鮮明に掲げている中で、数々の困難に遭遇していると思われるが） 敦賀集会をした頃に「見たことのない車が止まってた」等の話を聞いた。公安かな、と思っているが、はつきりとはわからない。

（門徒さんの反応とかは） 苦情や抗議は直接自分にはなく母に來たりする。寺報の中に原発問題を盛り込んだりしたこと等に対して。もつとも、ひいき目で見られる人がいないわけではないが。門徒の中に原発関連会社に就職している人やそこから仕事をもらっている人もいる。仕事がなくて『もんじゅ』が動き出したらあるかな」という期待感をもつ人に対して『もんじゅ』再開を批判する私信をそつと置いてきたり。間接的な意思表示、寺の役員を引き受けてくれないとか、も体験する。ただ、今は原発があることが前提になっており、議論する場面にはなっていない。原発の是非が選挙で決するような状況とは違うから「何か言うとするな」ぐらいの域か。

（敦賀市の産業構造の中で原子力に支配されているが） 市税がそれに依っており、それぬきには行政そのものが成り立たない。また仕事をもらう、という部分が大きい。

（朝日新聞の看板記者の取材を受けて） 原発の背後にある問題を説明すると「全く知らなかった」と驚く。核燃料サイクルは資源の有効利用（平和利用）、というPRによって、闇の部分が隠されていることは、かつての満州開拓とだぶって見える。『もんじゅ』の原子力開発機構の人たちは、エネルギー開発の夢を抱き、誇りをもって国策に従っている。そして、私らを「迷惑な人」という感覚で見ているのだろう。しかし、三分の一が国策の犠牲になった満州開拓団と一緒に、彼らもまた被害者になる可能性がある。

（住民被曝の事実を突き付けられて） 敦賀市内在住の五〇代半ばの女性から、手紙が数回、電話も頻繁にある。敦賀一号機の排水口が内海の方にあり、さらに一号機が最初の頃ものすごい汚染を出していたようだ。県が公にしてい

るデータで、最初の三年間ぐらいで、以後三〇数年間若狭の原子炉が出した放射能の九〇％以上を放出している。排水の問題だけでなく、希ガスの量がすごい。この女性は高校生の時に髪の毛が抜けた、と言う。放射能が含まれる雨に触れたと思われる。四〇年前、第二次成長期の人に被曝があるようだ。彼女が言うには自分の周りにも肺ガンになったとか、そういう人が多い、と。自身の子どもは一人が小頭症で、一人が原発性（慢性）血小板欠症。自身も甲状腺ガンだと。これはおかしいと、福井の医師を問い詰めたら、明らかに被曝が原因である、と言われたという。そして、こうしたことを学会発表した医師が飛ばされてしまった、という話は知る人ぞ知る。他に、学校の教え子が被曝しているとか、家族が三人とも甲状腺ガンとか、白血病や血液の病気等、どうも住民被曝が着実に進行しているように思う。地元にある大手企業の人事体系で、定年前の社員が原発に再就職するしくみがあつたとも聞く。そういう人が被曝して亡くなってもわからない。（水俣病同様、公害病では？）そういう動きにはまだなっていない。因果関係を証明するのは簡単ではない。この地域に悪性リンパ腫が多発していると『週刊プレイボーイ誌』に書いた明石昇二郎氏は、噂の裏付けを取ろうとしたができなかった。出版された単行本はこちらの書店ですぐ売り切れて（買い取られて）一般の人はほとんど目にしていない。

（相談に対しては？） 出会いのきっかけは、敦賀集会を報じる中日新聞のインタビュー記事を見て勇気づけられた。集会後しばらくして電話があり、その後で手紙が来た。この女性は今までもっていき場がなかったがそれが可能になった、と。仕事は薬剤師で、医学についても詳しい。手紙には「敦賀に赴任した若い医師がその間子どもをつくらないようにしている」「上司から敦賀では冗談でも原電の話はすると言われる」との生の声が記されている。この問題をずっと『宗教者の会』でも相談していて「被曝一〇番」のような活動をやろうか、という話はある。が、その場合の態勢等、いろいろ難問がある。（態勢側が潰れてしまう。揚げ足取られたり）よほど腹くくってやらないと。医療関係や弁護士等の協力関係がないとできないだろう。阪南中央病院の村田先生や医療協会等との協力が必要

だろう。ただ、地元の医師が口をつぐんでいるから、そこに協力者がいないとシンドイ。浜岡では「妊娠する人の三人に一人は流れている」との情報もあるが。（現実には被害が出ているが、それを認め向き合うのか、目をそらすのか、ということ）水俣病にしても薬害エイズでも同じ。昨年の政府交渉の時には、データ取ったり統括する部署がない（最初から想定していない？）、という話だった。病院とか医療機関にはデータあるのかも知れないが、厚労省はわかってても「ない」としか言わないだろう。何かあっても、後から「ありました」というような。向こうからは出してこない。（それを認めたら全体の補償問題になる、という危惧があるのか）（御用学者やプロパガンダの問題、メディアが推進の一翼を担っている）新聞記者自身が限界を語っている。「批判的記事書く情報を得られなくなる」と。（一般の人は直接自分に危険が降りかかって来ない限り考えないようにしているのか。こちらの人は皆ヨーン剤など持っているのか、と思っていたが？）それがきつちりと渡るようなしくみの防災対策で機能するかどうかはわからないが。行政側に計画はあるにしても。（そうした問題は一般化していると思いたくなるが。事故トラブル、スキヤンダルも多いし。例えば美浜の二〇〇四年の死傷事故の前後はどんな感じ？）課題を共有して語ることになかなかならない。（そういう雰囲気の中で「頑張らねば」という根っこにあるものは？）そのことをやらないと自分の存在価値がなくなる、という感覚。問題にできるのは宗教者である私らしかないだろう、と。利害や損得関係から自由という立場。（そういうったものに縛られないのが本来は宗教者だが）そこで反応してもらえることが一番力になる。

昔は学校の先生がもう少しキチツと言ってくれたともいう。「雨に濡れるな」とか、原発の危険性等も言ってくれた、と。ところが今は学校教育で逆の洗脳が行われる。学校の先生がそういうことを問題にできなくなっている。それが一番恐いこと。二〇数年前頃からそういう問題意識のある教員を福井県が採用しなくなった。俵万智がなぜ神奈川の教員になったのか不思議だったが、彼女は福井県の採用試験で落ちた。感覚の鋭い、社会に対して問題意識をもっている人を採らなくなった。その結果、福井県の学力は全国でトップクラスとなった。用意されている答えに対し

て、はやく正確に到達する能力が高いということ。その答えが真実か否かを問う眼が閉ざされている。(科学技術庁と文部省が合体した象徴的な姿)「原子力が地球に優しい」というあのプロパガンダは本当に恐ろしい。私たちの時はいろいろ言える環境だったが今はないと思う。特に高校でも、生徒の就職先との関連で。(医療も教育もそうだし、宗教だってそういう。大谷派で前に冊子『いのちを奪う原発』を出して、いろいろあったと聞いているが、教団の中でその後の状況は?)出したことが一つのベースにはなるが、問題意識はそれほどではない。でも、そこからステツプアップしていければと。

(大谷派内部では、どういうことを言われるか? 日蓮宗ではなかなか重い腰を上げてくれず響かない状況だが)

大谷派はまだ比較的そういう感覚をもっている方がいる方だとは思いますが、地元ではなかなか理解されない。大谷派は敦賀に二六カ寺あるが、敦賀での全国集会を開催した時に行った映画会・写真展に来てくれたのは、二人だけ。宗教なり念仏ということと結び付いてこない。(これまで大谷派では、ハンセン病や部落差別や死刑廃止等やってきているが?)一人がいくつにも絡んでいる。心が開かれない人は全く無関心。本来、社会に対して心を開いていくようなものが親鸞の教学。でも、今は少数派でしかない。(他宗門からは、大谷派は中心部に強権体制があつて、その故に反体制も育ってきているように見えるが、それらのせめぎ合いでの展開なのか?)教団改革ということがあつていろいろやってきた。法主がいたのを門首制に変えた。また宗憲という憲法をつくった。そこまで行つたのだが、今度はその既得権を守る方向に働いてきた。そうすると原発や靖国のことをガンガン言くと、体制側に具合が悪くなる。その中で、リーダー格の人が人事的に切られたりしている。

(今日蓮宗も大谷派も個人で行動していて、まとまってやれていない状況に見える。教団としてこうだ、という声明を出したりして一丸となつて取り組むべきなのか。今後理想像としてはどう考える?)例えば大谷派では、死刑には反対声明を一〇回以上出している。では出したからみんなそういう意見をもっているかというのと、そうはならな

い。こんなもの出てたのか、とか、本山は出してるけど自分は違うとか。一丸となって、はクセモノで、やはり基本は一人が一人の言葉で発するしかないと思う。それに共鳴する人がいたら、その共鳴した人が別の言葉で発することで何かが変わっていくと思う。宗教者の立場として何を問題にし、それをどうかみ砕いて発信していけるかが、問われている。私も敦賀の中でメッセージを送るだけは送っている。そうした中で向こうから何か反応が出てくるのではないかと。その時にキチッと話をしていくしかない。無理やり押し付けていくことはできないし、押せば押すほど引かれてしまうだろうと。今やれることは、寺報をベースに発信しながら、あるいは市民団体が行動する時衣を着て一緒にいて行く。その中で何か感じてくれる人もあるだろう。そこからどう深まっていけるかわからないが、続けていくしかないと思う。（門徒さんで電力に勤めている人は沢山いる）逆に言うと、電力会社の前で何が語れるか、ということ。充分に語れていない。ではどう伝わる言葉を発していけるのか、自分の宗教心の問題。（電力会社もホンネの部分で葛藤がある。プルサーマルはやりたくない）原発を推進する人たちは、敵ではない。

（実態として、教団はこうだ、と言っても誰も動かない。何か問いかけを組み立てていく努力をすべき。やるのは個人だが、教団で問いかけて。教団で出れば聞こえ方が違う。やってみて同じだったにしろ、可能性を探らないと。自分だけで満足してはダメ）（日蓮宗では立正平和運動という他教団に先駆けた運動があつて、世間の動きに同時進行が先駆けた形で。ただここでは反核と原発がつながっていない）それが一番の問題。例えば広島・長崎の被爆者が『もんじゅ』に物申すということにならない。（焼津の放射能マグロは現在の原発問題につながる、放射能の恐さを知らされたはずではあつたが）（ビキニの核実験と放射能マグロを、この国は体験している）外務省で非核三原則に矛盾する密約を行った。『もんじゅ』を動かすことも非核三原則に矛盾することだが、原発と核は同じものだという押さえ方が全くされない。鳩山さんが国連で「核兵器開発能力がある」と総会でも安保理でも言っていることの問題性をマスコミもほとんど触れない。（平和利用の縛りがいかに強い）原発がエネルギー技術と思ひこまされてい

る。日本以外の国では軍事技術ととらえるのが常識なのに。広島・長崎・ビキニの延長戦上にあるのにそうではないと切った。そうした情報の上で、平和利用だと思ひ込まされている。

（立正平和運動、あれは原点を問わないといけない、と思う）三月に祝島で披露されたお二人（梅森・三好両師）の太鼓は良かった。ものすごいインパクトがあつて、いいと思う。それだけで宗教者の発信として伝わるものがある。（ある意味では日蓮宗の一つの宝だから、頑張らないと）もはや言葉でどうこう理屈言う必要もないのではとも思う。（以前に六ヶ所村の交渉時に外で太鼓を撃ち続けて思いを一体化させた体験がある）

3. 「原発マネーフアシズムに対して」（中島哲演師）

（原子力のあらゆる問題点が凝縮されたこの若狭の地で、対峙し闘ってきた歴史について。それと明通寺の歴史、特に坂上田村麻呂の「蝦夷征伐」との関連。また、ご自身の被爆者救援の活動からも。これら三点を踏まえて）私は初めから反原発派でもなく、田村麻呂の意味を深くとらえていたのは早くからではない。諸々の問題に取り組むプロセスの中で、明通寺や真言宗、仏教の原点とは何なのかを、問い直し続ける作業をしてきた、という気がする。私はずもともと社会的な問題について、積極的に関わろうとはせず、文学や芸術の方面に目を向け、外的な問題には意図的にガードするような類いの人間であつた。そういう人間がなぜ目を見開かれたか、一番のきっかけは、原爆被爆者の方との出会い。そして、ヒバクとは核兵器とは何ぞや、から、どんどん原発の問題まで絡まってきた。最初は、これらは結び付いてはいなかったが、途中から否応なく気づかされた。

被爆者に関しては、地元に一・二名、福井県全体で一八二名ほどだったが、小浜管内で二〇名ほど潜在被爆者が加わつた。結局、原爆被爆者援護法ができるまで、との託鉢は三・一八カ月、続けざるを得ないことになった。一九六八年に始めて援護法ができた九四年まで。私たち宗教者には、困っている人のために、という構図があるが、私の場合い

わゆる慈善的な行為として終えてしまうことが嫌だった。特に大きな被爆者援護などは、やはり国や地元自治体が責任をもってキチッとケアをしないとダメではないか、という思いもあって、援護法ができるまで、と。そこから私はヒバクそのものの恐さに接することになった。小浜・若狭の被爆者では、後始末に入って残留放射能で被曝した人たちが圧倒的に多かった。にも拘わらずこの二次被曝の人たちは、常に自分自身の健康の不安だけでなく、子どもや孫の代に至るまで、自分の結婚・出産、子どもたちの就職・結婚、また孫の誕生の過程、それぞれ喜びであるべき場面で、大きな不安をもっていた。二次被曝が間接的な被曝であるにも拘わらず、時間的にも、自分だけでなくずっと後の世代まで悪影響を及ぼしていく。陰湿・陰險な被害、社会的な差別も受ける。それらを私は学ばせられた。

その中で、小浜に原発誘致の問題が起こった。既に六基の原発が若狭に建設中だったが、足元に原発問題が押し寄せ、直面せざるを得なかった。原発とはそもそも何ぞやと。それまで被爆者援護や核兵器の問題に関わっていながら、原発といま一つ結び付いていなかったが、六九年、原発の問題を科学者の講演で初めて聴いた。とてつもない死の灰を生み出して、プルトニウムという核兵器の材料になるものも同時に作り出される施設だ、ということを知った。これまでの関わりで、私は一発で理解した。これは絶対ダメだと。それから私は原発問題に関わり始めた。七一年に結成した「小浜市民の会」には、地元の労働組合の連合組織や原水禁運動の市民団体、高教組、漁協組合等が会に加わってくれた。当時、六〇年安保闘争以後、共同行動が難しくなる時代だったが、小浜の場合は、いわゆる革新勢力の団結に保守的な市民も加わり、最終的には署名運動が展開された。有権者過半数の署名を集めたが、小浜市議会の保守会派は不採択にした。が、小浜は、市長自身は誘致を考えていたが、反対多数で断念する、と市議会で表明し、止まった。小浜では一九七二年、七六年の二度、原発を阻止した。二〇〇四年と二〇〇八年に、いわゆる中間貯蔵施設も阻止してきた。いずれも、市民運動と首長とが手を組み、市民運動の意向を受けて誘致しないという形となった。中間貯蔵の時保守層が頑張ってくれた。小浜の市民運動の歴史を通じ、私は市民の良識に誇りを感じている。小浜

は若狭の文化的中心地で歴史も古く、古き良きものは守っていこうという良き保守性があり、いかに先進的なものでも、正体のわからないものには安々と飛びつかない氣質があった。小浜がストップできたのにはそうした理由もあった。中間貯蔵施設の動向は、またこれから問題になってくるとも思われるが。

明通寺の歴史との関係では。「海のある奈良」と言われるほど早くから開かれてきた小浜は、京都・奈良、畿内から最短の玄関口で、また朝鮮半島や中国へも、近代以前は表玄関の役割を果たしていたと思われる。その地にこの明通寺は八〇六年に、田村麻呂によって創建された。寺の文書を見て、孤魂窮鬼を救わんがために、亡魂得脱を願う、鎮魂の意味を含めた表現があることは知っていたが、それを自覚し始めたのは二〇数年前で、特にアテルイとモレが強烈に結び付いたのは数年前。

『はとぼっぱ』通信で「核のゴミや再処理工場を六ヶ所へ押し付けて憚らない潜在的な国民意識は、古代の蝦夷征伐のイデオロギーの命脈を今だに保持しているように思えてならない。アテルイやモレたちの鎮魂と平和を祈願して坂上田村麻呂が創建した明通寺の住職たる私は、岩手や青森の人々の痛みと願いを切実に共有せずにはいられない」と述べた。単なる仏教ヒューマニズムだけで田村麻呂が建てたのではなく、古代の呪術的な観念も作用していると思う。怨みをのんで残酷な形で殺された相手が怨霊となって祟っては困るという意味があったと思う。彼は仏教と出会っていたので、怨親平等に用いる鎮魂の意味に平和の願いを込めたのではないか。京都の清水寺の三重塔は田村麻呂の息子が寄進している。子孫の側が先祖が行った過酷な行為への償いの意味を込めて、先祖と子孫の側が呼応し合う形で。それを仏教が媒介したと思われる。沖縄と若狭と六ヶ所の問題は結局同じ構図の中にあるのでは、と指摘している。

ここに今、若狭の四〇年の決算をするような集約する文章を、最新の『はとぼっぱ』に書いた。私は現状を「原発マネーファシズム」ととらえている。「若狭へ原発を集中させた過程で…最も有効だったのは金力（交付金等）」だっ

たかもしれない」最後の法的財政的整備については、地元住民がこんなに原発の危険と引き換えのカネづけにされているシステム自体を、原発に依存しない形の財政的な方に転換していくべきだということ。『もんじゅ』再開目前の地元住民の声をこの一七七号には、収録している。これから原発がつくられようとしている所は、現地も頑張るし、支援も張り合いがある。ストップできる可能性があるから。ところが若狭や六ヶ所、次から次から既成事実化されてきた地域は、運動やる側もシンドイし支援する側もシンドくて、なかなか応援してもらえない。若狭は『もんじゅ』の問題があるから、県外からもいろいろな応援を受けるが。

（被爆者救援をやりながらも、実際に小浜の原発誘致の話になるまでに結び付けられなかった、というのは何が問題であったか？）小浜の原発問題は六八年、敦賀は六〇年代はじめから。確かに私も被爆者援護で頭がいっぱいだったこともあるが。（非常に巧妙なトリックの中で原発問題が切り離された情況で）やはり「平和利用」の縛りが大きかったと思う。原水禁運動も分裂していた。私が原水禁運動と被爆者に出会って参加した時は、その分裂をはらんでいる年だった。私に残ったのは、被爆者を何とかしなくてはと。運動面の分裂のしわ寄せ受けるのは被爆者だから。原水禁運動の分裂は原発にも尾を引いてきて。結果的には、商業原発が増えていく中で、「平和利用」がこれを合理化する口実に使われてしまった。それによって国民全体が、被爆二世の人でさえ惑わされた。

私は何よりも、国策で原発を推し進めたのはカネの力だと思う。現地で受け入れたのも結局全部カネの魔力で。全体を支配しているのは「原発マネーファシズム」。昔は戦争に行きたくないと言えば監獄にぶちこまれたり刑罰を招いたが、今はカネの力で黙らせる。最初の六基も全部、金Ⅱ暴力・権力で封鎖された。（黙らせる過程で被爆者が増えてきている。これらを問題にすることによって原発問題の本質を明らかに）やはり私の運動の原点に立ち戻ってくる感じで。

（警察にどういうことされたかも）

個人的には電話の盗聴や私服の尾行等が。大飯三、四号増設の時、実際に抗議

に小浜警察署に行ったところ「警察沙汰になること自分の村ではしたくないので出入りはしないでくれ」と区長から電話があった。反対する側に圧力を加える。警察署で私服が私の両脇抱えて部屋から追い出す。聞く耳もたないという感じで。最終的には公開ヒアリング。英国では二百数十回いかなる立場の人も意見表明できるが、日本の場合は半日だけの、全部機動隊が取り巻いた会場で、それに守られた中でセレモニーとしての八百長問答が行われる。そういう形で新設されてきた。最初の数基は公開ヒアリングすらなかった。

八八年に『原発銀座若狭から』という本を出して、その中で現地証言としてナマの声を伝えておいたが、背景にあるのが原発集中化の問題。その延長上に起こっていることを知ってほしいと思って書いたが。聞かされる側も理解しないとシラケてしまうとかの問題も出てきてと思うので、その辺も本当は課題。私は意識的に歴史的時間軸でとらえていく。過去をキチツととらえ現在を直視することが未来へのビジョンをはっきりさせることにつながると思う。が、この頃語りにくくなった。みんな暗い追い詰められた状況がある。それに加えて原発の極め付けの憂うつな重苦しい問題は勘弁してほしいというものが、受け取る側にもあるのではと思う。焦燥感と敗北感と絶望感でさんざん内面的に苦しんだあげく、スピリチュアルな方向に、という人もいる。環境問題や文化活動に取り組んでいる若い人たちは多い。私は原発問題をストレートにもちこまずとも、彼らと歩調を合わせながらソフトな形で伝えられないか、と模索をしている。歌や詩には言葉の力がある。数字的データや政治経済的言葉で説得するだけでなく、人間の心・魂まで届かせるべく、様々な複雑な現実を短い言葉に圧縮して突き付ける詩歌の力に期待もする。

我々宗教者から言くと、九五年は日本にとって悪い画期的な年だった。阪神大震災が年頭に起こり、オウム真理教が春摘発され、年末に『もんじゅ』の事故。オウム真理教は先駆けて「科学技術省」を名乗っていた。そこに集まっていた超エリートたちが、その省のもとにヒンズー教のシヴァ神の陰に隠れてサリンを作り人殺しをした。一方、日本政府の科学技術庁は文殊菩薩の名前に隠れてブルトニウムを作って、陰に核武装の野心を示した。オウム真理教解

体の論議があつたが、私は動燃事業団や青森の核燃の方を同様に解体すべしと、書いたことがある。宗教的な悪利用があると思う。

原発に関しても問題が蓄積してこないとなかなかわかってもらえないのか。沖縄はようやく今度の政権交代で国政レベルで国民全体の問題にせざるを得なくなつた。原発はそこまでいつていない。沖縄も結局今、専ら辺野古をどこに移すかという議論で。ではグアムでいいのかとなると、そこはかつて日本が太平洋の島々を植民地化して大変な目に遭わせた地域。原理的に憲法九条の根本精神に立ち返る以外に解決はないと思う。

若狭の現状も、『もんじゅ』が今問題になつていますが、それ以外にも諸々の問題を抱えている。手のひらの五本の指は形が皆違つているが、同じ手のひらにつながっている。しかも指の中にも手のひらにも同じ血液が流れているはずだと。指それぞれが、いろいろなレベルに適用できるが、若狭で言えば『もんじゅ』やプルサーマル、老朽化、原発震災、廃棄物、被曝者の諸問題。『もんじゅ』だけに關わつていられない。次から次へ、一々全部關わつていたら身も心もいくつあつても足りなくなる。都市レベルの運動は原発でもセミプロ化し分化してきて、その人たちが現地にコンタクトとつて来る。彼らは私たち以上に詳しくなつてゐる。それはそれでありがたいことだが、今はそうした個々の問題だけでなく、もっとトータルに手のひらの部分を、なぜこんな問題が派生してくるのかという総合的な関連性を全体的にとらえた上で、親指や人差し指の問題に取り組んでもらう、ということが大事になつてきていると思う。

（若狭と京阪神との電力需給關係の構図については？）前号の『はとぼっぱ』にこう書いた。「若狭においても『もんじゅ』の再開や高浜原発のプルサーマル、老朽原発の延命、原発震災の不安など、それぞれに固有の問題を抱えているが、根本的な問題から目をそらしてはいけなйдらう。若狭の原発群の昨年の発電量は八〇四・四億キロワット時、全国原発のその約三〇％を占め、一位に。その八〇四・四億キロワット時はすべて関西圏に送電されてい

るが、若狭地域の年間消費量は一〇数億キロワット時に過ぎない」特に関西電力の美浜、大飯、高浜のエリアの年間消費量は五億キロワット時未満。そういう地域に関電の一一基の原発がある。原発は高等数学が駆使されているが、本質の問題は算数でわかる。一〇数億キロと八〇〇億キロ、この対比は何なのか、ということから問題を掘り下げた
い。

（若狭では労働被曝や住民被曝は話題になっているか？）この問題は、まず実態を把握しないといけないが、なかなか難しい。一つは、ある医師から示唆されたが、ガンで死亡等の統計に上がっているのは、臨終の際の症状が第一原因として。本来のガンや白血病等も確かにリストアップされるが、それらは二番目三番目ぐらいに隠れてしまう。従って統計上、他の地域との違いが出てこない。一つは、因果関係の特定に関して、本当にガン・白血病の結果が実証された暁ではダメで、予め問題のあるものは予防医学の視点で処理すべきだと思う。医学科学上の悪しき実証主義が、問題の浮上することを阻止している面があるのでは。さらには、お金の問題。現地住民がガン・白血病でたくさん亡くなってもなぜ表面化しないかというと、直ちにお通夜の現場に見舞い金その他が飛ぶ。ガンの入院でも、家族と本人を交えて陰の交渉が行われる。実際、私も弁護士を連れて病床まで行った。大飯原発の放射能の水を被ったための症状は見え見えだったが、本人自身が労災保険には言ってくれるなどと言う。自分の子どもが教師をしているのでオープンになると困る、子どももそう言っている、だから伏せてくれ、と。そういう形で表面に出ない。

もう一つ言えば、市民の会で産婦人科医師から三万円のカンパを受けた。お礼の電話で会報に報告させてほしい、と言うと「絶対、匿名にして下さい」と。「ウチには関電の社員と結婚している看護婦が四、五人いるから、考えて下さい」と。公立小浜病院でも、父親が大飯原発労働者の六カ月胎児は成長の度合いが遅く、二、三カ月の成長度だと。原発被爆者で死産流産を繰り返した女性たちのお話を聞いて感じた疑問は、それで理解できた。多くは臨月を迎えられない。この例が、女性被爆者に圧倒的に多い。私が知っている長崎で被爆し小浜の人と結婚してこっちに来た

方は、何度も死産流産を繰り返して離婚し、長崎に帰って亡くなった。電話を受けると幽霊の声のようだった。身も心も孤独絶望そのもので。小浜にいる時も午前中はいいが、午後にはシンドそうな声で。仕事就きたくとも健康に波があるから定職にはつけない。そういう被爆者の実態をつぶさに知っていたから、原発の問題も別のアングルから、一発で胸にきた。

とはいえ、電力会社も安全や放射能の管理にそれなりに気を配っていることは事実だろうが。それでも、隠された被曝や廃棄物の問題は、こんなものの後の世代に引き渡しているのか、という本質的疑問を抱いている。

（深刻な被曝の現実がありながら、未だに世の中の関心が示されないのは？）労働者被曝の問題では、現在こんなに不況の時代だから、吸い寄せられていないかと思つて。日当一万円ぐらいは保障されるから。これとて一人当たり四、五万円出て、下請け構造の中で中間でピンハネされているが。原発は最先端の科学技術を駆使しているはずが、前近代的な構図がある。今、被曝労働者の累計が四五万を超えたという。放射線影響協会が毎年、年間の統計を出している。以前は年五万前後だったが、昨年度から七万に増えている。数だけは出さざるを得なくなつてきている。補償も不十分で社会保険すらない人もいる。

（環境面から言えば、地球全体が被曝している。これを続けていつてどうなるか？）意図的なP.Rが行われている。この前私は、これまでの反原発運動の中で専門家が果たしてくれた役割は大きかったが、自然科学者に片寄り過ぎていたのでは、と言った。それは大事な領域だが、原発はそのことだけでは動いていない。お金の力、政治的経済的な力、そのシステムによって、国策として電力企業の利潤追求のシステム自体が動かし続けてきた。そうなるもともと、専門の社会科学や人文科学、哲学や人間の心理や文化に関わる問題が大きくなる。それらを支える人間の意識、価値観、幸福観、文明観等、精神レベルに関わる問題が根底にあると思う。だからそういう方面も含めて総合的なアプローチを行い解明して、解決のビジョンを提言していかないといけない。自然科学の側面からのみ「危険だ、健康に良

くない」と言って、原発問題が収まってくとは思えない。

（反対運動側も国会議員を使うことも重要では？） 梓の外にいて「反対」を表明するだけではなく、内部からも良識派の人が声を上げていくような動きにならないと。小浜で二〇〇四年の中間貯蔵を阻止した時には、結果として自民党小浜支部が瓦解した。幹部の人たちが反対して、再編成を余儀なくされた。商工会議所も会頭副会頭が変わった。無所属の市会議員や農協婦人部が動くとか、従来考えられなかった人たちが頑張ってくれた。そういう市民の運動を反映して、これまで全国で二八地点、原発を阻止している。再処理工場も三、四地点で防いでいる。こうして今ある原発を上回る地点がストップさせてきている。

（原発の依存から抜け出るために、どう取り組んで行ったらいいか？） 現地固有の問題もあるが、国策・全体の問題として考えていった場合に、三つの問題点を指摘してきた。第一は省エネ対策を徹底していくこと。これは宗教的に表現すれば「少欲知足」、キリスト教でいう「清貧」、それらの理念につながる中身を掘り下げて、どう具体的に対策として打ち上げていくか、ということ。二つ目に、代替エネルギーの方策を懸命に考えていかなければいけない、と。三つ目は、原発問題の後始末。これも考えてもらわないと原発現地に未来はない。炭鉱等使い捨てにされた地域では荒廃をしている。原発現地で、原発のお墓だけが建って住民が住めなくなるようなことでは困るので、これは全体の問題として。これまで散々原発のお陰を日本国民は受けてきたから、その後始末知らないでは通らない。いくらお金がかかっても、国民の税金を投じてでも、廃炉や廃棄物の問題をどうしていくか、ソフトランディングしていくのか、その具体的対策は短期・中期・長期まで必要と思うが。三つの視点を貫いてもらわないといけない、と思う。二つ目の問題は、風力、太陽光、自然エネルギーが、どうしてもクローズアップされるが、現実に変な出力の電気を一挙に転換するのは難しい。中型の火力発電なども、あまりCO₂を出さなくて熱効率もいいもので新しい型のものも、過渡期としては考えていく。都市部なども、東京でいえば二三区ごとに中型のコジェネの発電施設を作っていく

とか。

（日蓮宗に対して何か？） 平和運動等に於いて、日蓮宗の皆様が草分けだった。先頭に立って運動されてきた。この地域でも日蓮宗の方々には応援をいただいた。それで私も孤立感をもたずに宗教者として僧侶としてやってこれた。（真言宗さんの方では？） 絶無ではないが動きは鈍い。それぞれ、自分は表には出ないが「お前のやっていることは悪いことではない」と、サポートしてくれたりカンパしてもらったりは、真言宗の中でもある。

（現宗研の中でも、なかなか原発問題に触れたくないという感じを受けるが？） 一つはやはり「平和利用」の縛りの問題があるのではないか。そして認識度の温度差は様々なレベルにあるから。

『三・一一』後の追記

福島第一原発の過酷事故は、世の中をすっかり引つ繰り返してしまったかのようです。事故後の状況は今改めて詳しく述べる必要はないでしょう。世界がこの事故の経過に恐怖し、その後の展開に憂慮しています。そうした中、二〇一一年十二月に野田首相は「収束」宣言を出しましたが、それを信じる人はどれだけいるでしょうか。高放射線に阻まれ、現場の検証は長期的に不可能で、全電源喪失に至った直接原因すら特定されるには至っていません。津波到来前の地震による配管破断の疑いも根拠立てて指摘されてもいます。ともかくも、事故による環境への放射能汚染は継続中であり、予断を許さない状況を脱してはいません。そして、その大量放射能放出の影響が今後最も心配されるところです。

さて、『三・一一』の約一年前に若狭の原発現地を訪問した本レポートは、その年の十一月に脱稿したのですが、確かに福島事故で色あせてしまった感が否めません。また、『現代宗教研究』第四十五号には、同行した齋藤宣裕

師の適確に整理されたレポートが収録されています。その上で、二番煎じ的な報告を再度述べる意味は、取材した三氏の話の中に福島過酷事故後になお吟味すべきものが含まれている点を、加筆せずその話し口のままに伝えたい、という欲求によるものです。

太田和子氏は、原発の放射能問題や食に関する問いに対して、「私は一切考えない。事故や放射能汚染が起こったら、それは人間にとってのバチ」「地元の人には放射能が危険だと思わんようにしている」とキツパリ断言しました。百戦錬磨してきた彼女なりの達観が示されている回答ではありますが、現実となつてしまいました。○八年の集会では、もちろん本心ではないでしょうが「中途半端な事故ではダメだ（それでは覚醒されないから）」と語っていました。あるいは過酷事故が避けられない予感があったのかもしれませんが。若狭湾一帯は巨大地震が起る確率が高い、と地震学者から指摘もされていましたから。私たちの目線で言えば、謗法行為による亡国の姿を見据えて、となりましょう。

岡山巧師の語る現地ならではのシンドさ、住民被曝の訴えという次元は、福島事故であるいは吹っ飛んでしまっただかもしれません。ただ、周囲の理解度が進むことがあっても、苦悩から解放されはしないでしょう。なぜなら、比較を絶する福島の放射能汚染と、子どもを含めてそこに留め置かれている実態があるからです。「安全」や「異常なし」で医療現場ともども被曝が隠される懸念は充分に予見されます。

中寛哲演師が、自坊の坂上田村麻呂の「蝦夷征伐」と鎮魂にまつわる由来を、現今の原発立地と電力需給に於ける差別性に関連付ける思いは、此度の福島過酷事故は鮮やかなまでになぞることになりました。また、自身の被爆者支援から原発問題へ向かう経緯は、この国の「平和利用」の欺瞞を照らしつつ、ヒロシマ・ナガサキからついにフクシマを招くに至った必然性を物語るようでもあります。そして「原発マネーフアシズム」は、福島第一原発に於いても顕著であったことも確認すべきだろうと思います。